

環境危機に経済活動のあり方を問う

ヒトの経済活動が生物の絶滅を加速させる

人類の経済活動の規模の拡大に伴って、地球規模での環境問題が深刻化しています。アメリカの社会生物学者 E.O. ウィルソンは、環境問題は本質的に 2 つに分けられると言います。1 つは人類の経済活動によって引き起こされるオゾン層の破壊、地球温暖化、大気や水の汚染など、生命の生存能力に対する脅威です。もう 1 つは、これによって引き起こされている生物種の多様性の喪失です。私たち人類は第 1 の問題による環境破壊を原理的に回復させることができますが、絶滅してしまった生物を取り戻すすべを未だ知りません。

生物種の絶滅速度は、人類が農耕を始めたころから速まり、産業革命以降、加速度的に速まりました。現在では人類の登場以前の 100 倍から 1000 倍の速度で生物種が絶滅し

岸 基史

Motoshi Kishi

【研究テーマ】

自然環境と調和した経済社会を築くために
私たちは何をどうすればよいのだろうか



ています。これは5億7000万年にわたる地球の生命の歴史で起こった5回の生物種の大量絶滅に匹敵する、あるいはそれ以上の速度といわれています。現在の生物種の大量絶滅が過去のそれと違うのは、その原因が人間の経済活動にあるということでしょう。

とはいうものの、これがどの程度正しい事なのか私たちは正確にはわかってはいません。たとえば、すでに発見されラテン語の学名がつけられている生物種の数でさえ、150万種から200万種までの間のどこかであろうという推測が有力であるにすぎないのです。同一種が新種と間違われ、二重に命名されているものが、全体の20～30%ほどあるのではないかと見られているからです。地球上に生息する生物種の種数となると、その推定数には365万種～1億1165万種と大きな開きがあります。ちなみに毎年約1万数千種が新しく発見されています。

自然の働きが人工化される現代

さて多様な生物種は局所的、地域的、そして世界的なレベルで直接的間接的にかかわりながら生存しています。これが生態系です。生態系は地質や気候などの非生物的自然環境に適応すると同時に、これらにも影響を与えています。生物同士そして生態系と非生物的自然環境とが関係しながら、自然界の秩序が成り立っているのです。その関係は複雑で、何の変哲もないある生物の絶滅が、局所的な生態系全体を破壊してしまうこともあります。

生態系は私たちにとって役に立つさまざまな用益も生み出



しています。大気や水の浄化、洪水の調節、廃棄物の解毒・分解、土壌の生成・保全、病害虫の制御、農作物の受粉や播種、気候の局所的安定化、美学的な美しさや知性的な刺激の提供などです。人類はさまざまな科学技術を発達させ、浄水場やダムを造ったり化学農薬を開発したりと、これらの用益を人工的に作り出すようになりました。その方が便利であり、またお金になるからです。しかしそのことが自然界の秩序を乱して生態系の生産能力を削ぎ、その結果、さらに人工的にそれを補おうとすることになります。けれどもあくまで人間の経済 (economy) は自然界の秩序 (economy of nature) の上に成り立っているのであって、すべてを人工的なものに置き換えてしまうことはできません。

いうまでもなく、人間の経済と自然界の経済 (秩序) との間に市場は存在しません。市場の価格調整メカニズムが働いて、生態系が生み出す用益の需給バランスがとられることはないのです。海を汚染することの引き替えにお金を海にばらまいても、何の意味もないでしょう。代わりに起こり得るのは、自然界からしっぺ返しを食らうという形で対価を支払わざるを得なくなることです。そのしっぺ返しがいつどのような形でやってくるのか (こないかもしれません) について、私たちは多少の科学的知見と経験知しか持ち合わせていないのです。

地球の一員として「幸福」とは何かを考えよう

人類は生態系の中に存在する生物であり、その活動が生態系に影響を与えるのは当然のことでしょう。ある程度の生物種を絶滅に追いやることも、必然的に起こることです。けれ

ども、限度を超えて大量の生物種を絶滅させながら人類だけが発展し続けることが可能でしょうか。人類の歴史を振り返ると、局所的な人間の経済活動の規模の拡大が周囲の自然環境を荒廃させ、都市や文明を崩壊させたという事例が数多くありました。今ではそれが地球全体に広がっているのです。

日本において絶滅の危機に瀕している種の多くは、かつてどこにでも見られた普通の生き物たちです。理由の一つに私たちが身近な自然を利用しなくなったことが挙げられます。自然との折り合いをつけながらうまくそれを利用してきた日本人の伝統的な知恵や生活様式から、多くを学ぶべき時でしょう。私は学生たちと共に荒廃した里山（さとやま）^{*1}を修復し、それを活用する方策を模索していますが、その中で最近「お金を出さなければ自分が口にするものを何一つ手に入れられないことほど貧しい生活はないのではないか」と思うようになりました。

私たちは便利であることや快適であることを、幸福であることと混同してはいないでしょうか。自然界の秩序を乱さなければ発展できないような経済社会のあり方は、どこかがおかしいとは思いませんか。まずは日常の生活のあり方や価値観を根本的に問い直してみましょう。私たち一人ひとりには微力かもしれませんが、決して無力ではありません。

*1【里山】かつて人々が日常の暮らしに必要な燃料（薪炭）などを調達するために利用・管理してきた雑木林（ヤマ）。広い意味ではこれに田畑（ノラ）や人里（サト）も含める。日本人の生活様式や価値観の変化によって里山の利用価値が無くなり、開発されずに残された里山も放置されたままとなっている。里山の荒廃と共に、人々の暮らしと共に生きてきた多くの生物が絶滅の危機に瀕するようになった。里山は日本の伝統文化を象徴するものであり、循環型社会の原点ともいえる。